

オープン
カレッジ

病院で血圧を測ったところ、前より数値が下がっていた。このとき、私たちは「体の状態が良くなったのだろうか」と考える。薬を飲み始めていたなら、「薬が効いたのかもしれない」と思うだろう。

しかし、もし同じ時期に血圧計も新しいものに替わっていたらどうだろうか。数値が下がった理由は、体の状態が変わったからなのか、測り方が変わったから

会計基準と企業の見え方

ような器具で、どのような方法で測ったのかにも目を向ける。

会計の数字にも、これと似たところがある。企業の業績を考えると、私たちはまず利益や売り上げなどの数字に目を向ける。利益が増えれば企業は順調に見えるし、利益が減れば苦戦しているように見える。会計数値は、企業を理解するための大切な手がかりである。

ただし、会計の数字は、企業の状態をそのまま映したわけではない。利益や資産の金額は、一定の会計基準に基づいて作られる。会

をどの金額で評価するか、一時的な損益をどのように扱うかによって、報告される利益の性質は変わってくる。

ここで大切なのは、数字の変化をすぐに企業の状態変化と決めつけないことである。利益が増えたとき、それは企業の収益力が高まったからかもしれない。一方で、会計基準の変更によって、利益の測られ方が変わったからかもしれない。反対に、利益が減った場合も同じである。数字の変化には、企業活動の変化と、数字を作るルールの変化の両方が関わっている。

もちろん、これは会計の数字が役に立たないという意味ではない。むしろ、会計数値は企業を知るうえで欠かせない情報である。ただし、その数字をよりよく読むためには、数字そのものだけでなく、その数字がどのようなルールのもとで作られたのかを考える必要がある。

背後にある

仕組みを読む

なのか、すぐには判断できない。もちろん、血圧の数字は重要である。しかし、その数字を読むには、どの



愛知淑徳大学 准教授
ビジネス 眞鍋 和弘

計基準とは、企業活動をどの時点で見え、どのように測り、どのように表示するかを定めるルールである。つまり、会計の数字は、企業の状態を会計という仕組みを通じて表した結果である。

そのため、会計基準が変わると、企業の活動そのものが変わっていき、数字の見え方が変わることがある。たとえば、ある費用をいつ認識するか、資産

企業を見る力とは、数字を読む力だけではない。数字の背後にある仕組みを読む力でもある。会計基準が変わる時代だからこそ、私たちは数字の変化に一喜一憂するだけでなく、その数字がどのように作られ、何を表しているのかにも目を向けたい。

まなべ・かずひろ 専門は財務会計。横浜国立大学大学院国際社会科学部企業システム専攻博士課程修了。博士（経営学）。1980年生まれ。